

中谷孝雄全集

第一卷

中谷孝雄全集

第一卷

講談社

中谷孝雄全集 第一卷

昭和五十年十一月二十五日

著 者 中谷孝雄

編 集 第一出版センター

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二二、郵便番号一―二二
電話東京(〇三)九四五―一二二(大代表) 振替東京二九三〇

印刷所 図書印刷株式会社

製本所 大製株式会社

定 価 三五〇〇円 落丁本・乱丁本はお取替します。

©中谷孝雄 昭和五十年 Printed in Japan (N)

中谷孝雄全集 第一卷

目次

春の絵巻

七頁

雜草

二九頁

二十歳

四三頁

春

五五頁

第一人者

八七頁

三十歳

一一七頁

田舎ことば

一五三頁

道化芝居

一七七頁

むかしの歌

二二三頁

残夢

二三七頁

朝の蜩

二七一頁

嵯峨

二八七頁

吉野

三一七頁

背徳者

三四七頁

故郷

三五七頁

庭

四二七頁

解説

駒田信二

四五〇頁

口絵写真撮影・講談社写真部 浜田益水

昭和50年7月 京都・上賀茂神社にて

装幀 岩本正雄

中谷孝雄全集

第一卷

春の絵巻

一

新しい学年が始まつて最初の日曜日のことだつた。石田は昼すぎから室町の下宿を出て嵐山へ花見に出かけた。花を見たいといふ気持はそれ程でもなかつたが、休暇中を故郷の田舎に帰省してゐて、やり場のない鬱ふさをその体感じてゐた彼は、群衆の出盛る賑かな場所がたゞたゞ懐しかつた。四条大宮の嵐山電車の起点までゆくと、彼はクラスの丹羽と保科とに出逢つた。丹羽も保科もやはり石田と同じやうに、何かしら得態の知れない精気に憑かれたやうな顔をしてゐた。三人は其処で一緒になつて、怪我人でも出さうなほど押合つてゐる群衆のなかに割り込んで、遮二無二電車に乗つた。ぎつしりと身動きも出来ないまでに詰込んだ乗客は、駅々での発着ごとにその反動を喰つて激しく前後にもみ合つた。女たちはその度に魂消るやうな悲鳴をあげた。石田たちにとつては、この息詰まるやうな車内の混乱と動揺とが快かつた。彼等はずつと強い手応へを求めるやうな気持

で、電車の発着ごとに期待の瞳を輝かした。

終点で電車を降りると、彼等は肩を組んで傍若無人に群衆の流れを押分けながら歩いた。道は人の往来で白つぽく埃立つて、人々はシヨールで顔を覆つたり、手巾をかざしながら歩いてゐた。時々着飾つた娘たちが、埃を蹴立て歩いてゆく彼等の傍を、苛立たしさうに馳けぬけて行つた。渡月橋の袂まで出ると、俄かにパツと峡谷の展望がひらけて、殷んな春のどよもしが彼等の体に押寄せてきた。三人は思はずその光景に打たれて立停つた。群衆の華やかな流れは、ひきも切らず狭い橋の上を対岸にまで続いてゐた。水嵩を増した急流がその下で白い瀬頭を乱してゐた。花は今向かひの崖の緑樹のなかに狂ほしいまでに咲揃つて、その梢は妖しく緑樹の枝と戯れながら、日光と風とのために複雑な陰翳の変化を見せてゐた。花と緑樹に覆はれた崖の裾には、青々と淵がよどんで、幾艘とない花見船がその影を踊らしてゐた。淵に沿つて崖裾には、細い一本の路が通じてゐて、人々は其処にも、蟻のやうな行列をつくつて動いてゐた。酒に弾んだ唄声や賑かな囃子の音が、水からも陸からも湧上つて、潤つた峡谷の空にたちのぼつてゐた。

「春ぢやのう！」

保科が感に堪へたやうな声をあげた。すると、その腹の底から流れだしたやうな声に應じて、いきなり丹羽が後ろから彼の首つ玉に獅噛みついた。保科は二三歩よろめきながら、咄嗟に姿勢をたてなほして、その悪戯者と組打ちを始めた。パツパと砂埃を立てながら彼等は暫く体ぢうの力で揉合つてゐた。彼等の顔には、まつ赤に血の色が燃えて、組打ちは次第に真剣なものになつてきた。石田は今まで笑ひながらその格闘をながめてゐたが、そのうちに怪しく狂暴な力にかられて、けだもののやうな叫声をあげながら、矢庭に二人の体にぶつかつていつた。

間もなく彼等は激しい揉合ひから離れて、そのまゝ川に沿つて逆か上つていつた。対岸の花を見るためには、こちらの丘に登るのが当然だつたが、何故か人々はみんな対ひの花の山に分けいつて、こちらへくる者は比較的少なかつた。彼等は声を揃へて寮歌をうたひながら、小松の生えたその丘を登つていつた。路の両側には、あちらでもこちらでも蓆を敷いて、幾組かの男や女たちが踊つたりうたつたりしてゐた。三人は時々歌をやめて、それ等の人々の批評などをしながらゆつくりと歩いたり、不意にまた大声をあげて馳けだしたりした。低い丘は直ぐ頂きに達した。此処にも花と酒とに浮かれた人々が、幾組となく群をなしてゐた。彼等がその間を縫つて崖の近くまでやつてゆくと、其処には思ひがけずやはり同じクラスの岡村が立つてゐた。彼は花を見てゐるのでもないらしく、ぼんやりと崖の端に立つて下の淵を見降ろしてゐた。一艘の花見船がその下に浮いてゐたが、彼の注意はその方にも向いてはゐないのか、舟の動きを追つてゐる様子もなかつた。制服制帽の彼の姿は、銅像のやうに思案にふけてゐた。

「おい！ 何を哲学してゐるんだ」

つかつかと丹羽が走りよつて、その肩を軽く叩くと、岡村はひどく驚いた様子で振返つた。そして、なほ暫くは三人の友人の姿を不思議さうにきよろきよろ見まはしてゐたが、突然突拍子もない声をあげて笑ひだした。そして上機嫌に三人の友人の肩を交々叩きながら、弾んだ声で喋りだした。

「実に愉快だね！ 僕は今日ほどこの世を美しいと思つたことはないよ。空を見れば空は青く潤つてゐるし、花を見れば自分の心までが明るくゆらぎ出すやうだ。それから娘たちの素晴らしさはどうだ、まるで兵隊のやうに丈がたかくて、びちびちしてゐるぢやないか……」

岡村の言葉には奇妙な昂奮と抑揚とがこもつてゐた。その弾んだ調子は普段の彼とは別人のやうであつた。何時もの彼は幾分鬱ぎ勝ちなところのある、無口で孤独な男だつた。三人は奇態な思ひで、互にその顔を見合つた。

「どうだ、君たちはさうは思はないか、こんな美しい風景を見てゐると、生れて初めて春に逢つたやうな気がするぢやないか……」

岡村はひとりではしやぎながら、やがて又三人に背を向けて、対岸の風景に目をやつた。その態度には、何か他人のことを顧みないやうなものが感じられた。誰も返事をしなかつた。彼等は思ひ思ひにあたり景色を眺めてゐた。

彼等の立つてゐる直ぐ向ひの崖には、川に臨んで温泉宿が建つてゐた。其処の部屋は川に向つて開け放つてあるので、浴客たちの騒いでゐる様子が手にとるやうに此方から見られた。彼等の様子は、戸外で騒ぎまはつてゐる人々に比べると何故かへんになまめかしかつた。立居の一寸した動作にも不思議に人の心をそるやうなものがあつた。石田は胸をときめかしながら、じつとその部屋部屋の様子に氣をとられてゐた。不意に湯上りの若い女などが、廊下の一方の端に現れて、そゝくさと部屋の奥に消えて行つた。

「いやに恍惚としてゐるね」

同じやうに対岸の旅館の様子に見惚れてゐた保科が、笑ひながら石田の腕を握つた。

「初めて春に逢つたやうな気がするね」

岡村の口調を真似て答へながら、石田はそのまゝ崖の下の淵に目を移した。船の酒宴はひとしきり酣はとなつて、芸者の三味線に合はして、三人の商人風の男たちが声をふりたてゝうたつてゐ

た。鼓を打つ舞子の白い指が、哀れに美しかった。石田はほつと重い吐息をもらした。その時、遠くに汽笛の音が響いて、やがて地響をたてゝ汽車が彼等の立つてゐる丘のトンネルをくゞつて、直ぐその上流の崖へ現れた。三人の若者は思はず其の場を飛退いた。風景の顔はみるみる煙のために曇らされて、長い真黒な貨物列車は直ぐまた上流に見えてゐるトンネルの中へ吸込まれて行つた。ふと気がつくと、岡村は顔にかゝつてくる煙の気にもかけない様子で、最後までその列車がトンネルに消えてゆくのを見送つてゐた。煙は暫くの間花の峡谷に迷つて、崖の腹を這つたり花の梢にまつはりながら消えていつた。

やがて、汽車の響きがすっかり消えてゆくと、岡村も崖を離れて三人の傍へやつてきた。彼等は一団になつて近くの小松の蔭に坐つて雑談を始めた。岡村は日頃の無口さにも似ず、ひどく冗舌になつてゐた。氣もそぶるな様子で彼はしきりにこの世の美しさを讃美した。それは何かに憑かれたやうなお喋りで、他の連中がからかふにもその隙がないほどであつた。彼の額には日頃の暗い翳がすっかり消えて、生々とした色さへ輝いてゐた。彼は繰返し同じやうな言葉で自然の美しさを述べたてゝ、他の三人の同意を強ひるのだつた。だが、間もなく話が女のことになると、彼は急に巫山戯けた態度になつて、珍らしく彼の過去の経験などを話して、まだ女を知らない他の三人の好奇心をあふりたてた。岡村は一枚々々着物をはいでゆくやうに、段々と話のデテイルに進みながら、初めて女を買つた時のことを、滑稽な手ぶりさへ交へて話した。三人の聞手はへんに堅くなつて話手の様子に氣を奪はれてゐた。中学を検定で済ましてきた岡村は、他の三人に比べて年齢も三つばかり上で、その過去には彼等の知らない様々な経験を持つてゐるらしかった。岡村はひとしきり女のことを喋り続けてゐた。けれども、次第にその顔には苦渋の色が現れて、やがて彼はぶつ

りと其の冗舌を断切つてしまつた。

だが、話が切れると彼は妙に落着かなかつた。そはそはとポケットに手を突込んでみたり、靴の踵で草の根を蹴つたりしてゐたが、暫くすると彼はまた喋りだした。

「この手を見て呉れよ！」

彼は不意に両手を拡げて、三人の前に突出した。

「随分小さい掌ぢやないか！ 僕は何時もの掌になやまされてゐるんだ。こいつを見てゐると、なんだか自分が化けものみたいに思はれてくることがあるんだ……」

彼は如何にも腹立たしさうにその手をふつた。そして、小さい掌は精神的にその人物の把握力の小さいことを証明するものだなどゝいつて、しきりにその掌を呪つた。よく見ると、それは彼の体との比例を破つて小さかつた。のみならず、その指は奇妙に節くれだつてゐて、老人の手のやうに萎びてゐた。

「まるで、子供のまゝ固まつてしまつたやうなもんだよ……僕には君たちのやうな伸々とした青春といふものが一度もなかつた」

それはひどく苛々した激しい口調だつた。他の三人は思はずそれに打たれたやうに岡村の顔を見上げた。すると岡村は不意に弱々しい微笑を浮べて、その手を引込めてしまつた。

「一つ掌の哲学といふ本でも書いたらどうだ」

間もなく丹羽がそんな冗談をいつたので、皆は急に楽な気持になつて、それぞれにその掌を拡げて、互にその大きさを比べあつたり、交々それを握りあつて握力の強さを試めしてみた。体の小さい丹羽の掌が一等小さかつたが、それでも岡村のよりは幾らか指が長かつた。掌の大きさでも、握

力の強さでも、やはり体の大きい保科が一番すぐれてゐた。

「岡村の本が出来たら、一つ僕に序文を書かすんだな……かつて彼はその掌を鉋もて断切らんとしたることあり……こんな調子で書いてやるよ」

握力の競争で保科に負けた石田が、呑気さうに笑ひながら言つた。すると、丹羽がまたその冗談の先を続けた。

「寧ろ一思ひに死んでやれと思つたことがある、そんな風に書いた方がいゝね、その方が序文としては効果的ぢやないか」

みんなは一度にとつと笑つた。すると、岡村が変に真剣な顔をした。

「今だつて、そんな風に時々思ふことがあるんだよ」

そして、彼は腹立たしさうに左の手首に噛みついた。石田はその時ふと、何かしらたゞならぬ決意に似た色が岡村の眼に浮んでゐることに気づいた。岡村は直ぐ思ひ返したやうに口からその手を離したが、手首には生々しい齒形が悔恨のやうに残つてゐた。それをみると、石田は苛立たしい一種の興奮を感じた。だが一瞬の後には、岡村は再び先刻の陽気な調子に帰つて、弾んだ声で女の話が続けだした。

暫くして、岡村の話がやつと終ると、皆は一度に其場を立上つて、誰からともなく丘を降り始めた。間もなく彼等は以前の橋のところまで歸つてきた。僅かの間だったが、其頃にはもう群衆は続続と橋の上を此方へ引返してゐた。陽が少し傾いて、対岸の崖には幾らか冷々とした影が漂つてゐた。彼等も亦群衆の流れに従つて、其処から電車の方へ帰り始めた。すると今まで三人と連立つて歩いてゐた岡村が、急に其処から引返して、対岸の大悲閣まで登つてみたいといひだした。皆は岡

村の言葉に賛成しなかつた。すると岡村はくるりと彼等に背を向けて、さつさと一人で橋を渡つていった。皆は暫くその後姿を見送つてゐたが、やがて彼の姿は人々の陰に見えなくなつてしまつた。

「岡村の奴少し変ぢやないか」

彼の姿が見えなくなると、丹羽がそんな風に言つて他の二人の顔を見くらべた。

「陽氣の加減だらうさ」

保科は気軽に答へて、大股にぐいぐいと歩きだした。石田も丹羽も直ぐその調子に卷込まれて、朗らかに笑ひながらその後続いた。

二

岡村と別れた三人は、彼のことなどは直ぐに忘れて、そのまゝ真直ぐに京極に出て、あるレストランで夕飯を食つた。其処で彼等は三人連れの娘たちと一つの卓に坐つた。いくらかそんな席をさがしてゐたのではあつたが、その店が混んでゐた為にそれは極く自然にいつた。都会育ちで社交的なところのある丹羽は、食事の間ぢうにうまく娘たちの会話を割込んでいつた。小柄な味噌つ歯の葉子といふ娘が、しきりに独りで丹羽の対手をしてゐたが、そのうちに彼等の間には一緒に丸山へ夜桜を見に行く約束が出来てゐた。食事が済むと、皆は連立つて灯火の明るく輝きだした四条の通りへ出ていつた。丹羽はその小柄でいく分運葉な葉子と並んで、ぶんぶん先に立つて歩いた。日本髪を結つた菊枝ともう一人洗髪を無造作に束ねた民子とは、黙つて其の後についていつた。石田と